



TITLE:

唐折衝府の分布問題に関する一解釋

AUTHOR(S):

菊地, 英夫

CITATION:

菊地, 英夫. 唐折衝府の分布問題に関する一解釋. 東洋史研究 1968, 27(2): 121-157

ISSUE DATE:

1968-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152770>

RIGHT:

東洋史研究

第二十七卷 第二號 昭和四十三年九月發行

唐折衝府の分布問題に關する一解釋

菊池英夫

まえがき

唐代前半期の兵制であるいわゆる府兵制度において、府兵の徵集訓練の機關たる折衝府が、地域的に極めて偏った分布を以て設置せられていたことは、既に濱口博士の研究以來明らかにされ、周知のところである。即ち、最盛期六百數十を算えた全國總府數のうち約四割強が關内道に集中し、次いで河東に二割強、次いで隴右を加えると全府數の八割に達し、これに河南北を加えて中國を南北に二分するとき實に九割五分がいわゆる北シナに偏在していたのである。更に詳しく云えば、折衝府の設置されたのは天下三二〇有餘州のうち僅か九〇府州にすぎず、これらの州は無（非）軍府州に對して有軍府州と呼ばれたが、北シナの中でも長安・洛陽を中心とする一九府州に三八〇府を置き、その東北面、北面、西北面の三方の四七州に二〇五府を配し、これら六六府州に殆んど九割が集中して置かれていたのである。以上のような軍府の偏在に對して古來行われてきた説明は、いずれも唐朝の中央集權策の端的な現われと見、いわゆる「實近虛遠、居重馭輕」の典型として、「舉天下不敵關中、則居重馭輕之意明矣」（陸贄・論關中事宜狀）と稱してきたのである。

しかし、この分布を更に仔細に眺めると、單に「居重馭輕」中央集權を云うのみでは説明し難い點が數多く存する。例え、(一)道單位に眺めたとき上述の如き偏在を示すばかりでなく、(二)一道内でも、州單位に見たとき大差があり、更にこれを各州の戸口數と對比するとき、その偏在ぶりは一層顯著となるのである。果してこのことを唐朝は、その統治政策の中でどのように考えていたのであろうか。

それは明確な企圖によるものか、それとも偶然の結果か。政策的意圖によるとすればその結果生ずる徭役負擔の甚しい不均衡を埋め合わせて全體として負擔の均衡をはかるどのような措置がとられていたか。勿論、簡點されて入軍すれば課役は免ぜられるというものの、果してそれで均衡を得たと云いうるのか。或はそのような均衡は考慮されていなかったのか。もし均衡が意圖されていたとすれば、それが崩れ去ったのは唐朝にとってどのような計算外の要素が働いたのか。即ち、この軍府偏在の事實を如何に解するかは、いわゆる府兵制崩壞論、更にはいわゆる均田租庸調制崩壞論にも大きな關係をもたざるをえない。

一 天寶元年戸口統計による載籍戸口に對する軍府の分布

唐代における戸口統計數字の年次的變動と地域的分布に關しては、既に少からざる研究が發表せられている。中でも日野開三郎教授による地域的考察^⑧は、極めて示唆に富む。これによって、安史之亂前における唐朝權力の財政的基盤が奈邊に存したかを推定せしめると共に、軍制上から見ても、それは籍民壯丁の徵兵制を前提とする限り、その兵力源、點兵母體がどのように分布しているかを示している筈である。然るにこれに對する徵兵機關・軍政機關たる折衝府の分布は、決して道・州・縣の戸口統計に見られる分布密度とは對應していないのである。

先ず天下各道の戸口數の多少と軍府州數および軍府數を對比して一表にまとめてみると次の如くである。

これによっても既に、各道戸口多少の順位と道内軍府州數の多少順位、および一州當りの設置折衝府數が全く區々であ

第1表 各道戸口順位對折衝府分布

戸口 順位	貞觀統計		天寶統計					
	道名	州數	道名		府州總數	軍府州數	軍府數	1軍府州 當り府數
1	劍南	25	河南北		29	7	86	12.3
2	關內	20	河南北		24 (26)	9 (12)	41 (46)	4.5
3	河北	22	江東南		18	3	3	1
4	嶺南	45	劍南		35	5	6	1
5	河東	16	關內		27	21	276	13.1
6	江東	11	河東		18	17	149	8.7
7	河南	24	江淮		17	2	2	1
8	江西	17	淮南		12	4	10	2.3
9	山南	17	嶺南		70	3	4	1
10	山南	17	山南		18	6	7	1
11	淮南	12	山南		17	4	7	1
12	隴右	18	隴右		19	12	33	2.8
13	黔中	8	黔中		13			

ることがわかるが、更に問題なのは、戸口數の上から見た州縣の規模には極めて甚しい大小の差が存したことである。軍府は唐では民政系統の州縣とは切り離され、中央直屬の機關であつたが、その設置は州單位に行われていたから戸口數との關係を見るための州單位の考察には便利である。

行政区劃は開元末、一五道・三府・三三五州・一五七三縣といわれるが、それら州縣は戸口數と重要度によつて等級を設けられ、それに應じて同じ州縣官の中にも品階に上下の區別があつた。兩京を防衛する同・華・岐・蒲州の四輔、鄭・陝・汴・絳・懷・魏州の六雄、宋・毫・滑・許・汝・晋・洛・虢・衛・相州の十望、それに次ぐ緊州（はじめ一〇州ばかり。後増置）以下、戸四萬以上および嘗て親王を刺史に迎えた州を上州、二萬五〇〇〇戸以上を中州、二萬戸未滿を下州とし、天寶のとき全國で上州一〇九、中州二九、下州一八九を算した。しかし上州の中には益州一六萬戸、魏州一五萬戸、婺州一四萬戸、太原府・宋州・滄州・宣州の一二萬戸、冀州一一萬戸、汴・曹・相・貝・潤・常州の一〇萬餘戸のごとき、戸數一〇萬以上に上る大州があり、一方下州の中には、鹽州の二、九〇〇餘戸、蘭州二、八〇〇餘戸、洮州

二、七〇〇餘戸、疊・宕州の一、二〇〇戸、瓜州の如きわずか四七七戸といったものであったのである。縣も西京の萬年・長安、東都の河南・洛陽・奉先、北都の太原・晉陽の諸縣を赤縣と稱し、また京師近傍の縣をば畿縣として別格としたほか、望・緊等の等級を設け、六〇〇〇戸以上を上縣、三〇〇〇戸以上を中縣、不滿三〇〇〇戸を下縣と定めていた。開元時代全國通計赤・畿縣合せて八二、望縣七八、緊縣一一、上縣四四六、中縣二九六、下縣五五四であつたという。縣にも戸數一萬を超えるものから僅か數百戸のものまであつたわけで、小州の中には大縣の何分の一かの戸口しか管せぬものが存したのである。こうした管戸數の多少を勘案するとき、戸口に對する折衝府の設置には更に甚しい不均衡が存することが明らかとなる。

ところでこれら統計戸口のすべてが丁男として兵役適格者であるわけではないから、兵役負擔の地域的偏差を更に明瞭ならしめるには、この戸口數に對する丁男數を推計した上で比較すべきである。戸數に對する口數の比率、いわゆる戸口率^①が各道においてかなりの差を有し、それはまた口數中の課丁男數の比率にも影響すると考えられるから、嚴密に云えば推計には色々の障礙がある。しかし今、新唐書地理志によつて天寶元年の各州戸口統計と、各州條下に注記せられた軍府數に近年の研究による修正を加えたところを比較してみると、別表の如くである（第二表、天寶元年道州別戸口丁數・軍府對比表）。

勿論もとになる諸數字が正確に同時點のものである保證はないし、特に軍府數については問題がある。従つてそれを操作して得られた數値も大いに疑わしいことは否定できない。しかし絶對的數値に重きを置かず、概數によつて傾向を把握する程度であれば充分役立てうるであらう。かくて各州一軍府當りの戸數を概算すると、關內道・河東道諸州に於ては、一府當り約二千數百戸から四〇五千戸となるに對し、河南道では、汝州の例の如く一府當り一萬戸、河北道では魏州の如き、一五萬戸に對して一府しか置かれていない勘定になる。

折衝府には州縣同様、京兆管内、京都近傍の赤縣・畿縣内におかれた赤府・畿府以下、上中下の三等があり、夫々

第二表 天寶元年道・州別戸口丁數，軍府對比表（據新唐書地理志）

〔關內道〕

府州名	領縣	戸數	口數	口/戸	一縣當 り戸數	一縣當 り口數	軍府數	縣：府	戸/府	丁/府
京兆府	20	362,921	1,960,188	5.4	18,146	98,009	131	1縣6.5府	2,770	3,324
華	4	33,187	223,610	6.7	8,294	55,903	20	1縣5府	1,695	2,034
同	8	60,928	408,705	6.7	7,617	51,088	26	1縣3.2府	2,343	2,812
商	6	8,926	53,080	5.9	1,488	8,847	2	3縣1府	4,463	5,355
鳳翔	9	58,486	380,463	6.5	6,498	42,273	13	1縣1.4府	4,499	5,398
邠	4	22,977	125,250	5.5	5,744	31,312	10	1縣2.5府	2,298	2,758
隴	3	24,652	100,148	4.1	8,217	33,349	4	1縣1.3府	6,163	7,395
涇	5	31,365	186,849	5.9	6,273	37,369	6	1縣1.2府	5,228	6,273
原	2	7,349	33,146	4.5	3,675	16,573	2	1縣1府	3,675	4,400
寧	5	37,221	224,837	7,444	44,967	11	1縣2.2府			
慶	10	23,949	124,236	5.2	2,395	12,424	8	1.2縣1府		
郿	5	23,484	153,714	6.5	4,697	30,743	11	1縣2.2府	2,135	2,562
坊	4	22,458	120,208	5.4	5,615	30,052	5	1縣1.2府		
丹	4	15,105	87,025	5.8	3,776	21,906	5	1縣1.2府		
延	10	18,954	100,040	5.3	1,895	10,004	7	1.9縣1府	2,708	3,249
靈	4	11,456	53,163	4.6	2,864	13,290	5	1縣1.2府	2,241	2,689
鹽	2	2,929	16,665	5.6	1,465	8,333	1		1,465	1,758
會	2						(1)			
綏	5	10,867	89,112	8.2	2,173	17,822	4		2,717	3,160
夏	3	9,213	53,014	5.8	3,071	17,671	2		4,607	5,528
全道 領州		軍府數 276								
27		軍府州 20								

〔河東道〕

州名	領縣	戸數	口數	口/戸	戸/縣	口/縣	府	縣：府	戸/府	丁/府
河中府	13	70,800	469,213	6.6	5,446	36,093	33	1：2.5	2,145	2,554
晉	8	64,836	429,221	6.6	8,104	53,652	15	1：1.8	8,105	9,726
絳	7	82,204	517,331	6.3	11,743	73,904	33	1：4.7	2,491	2,989
慈	5	11,616	62,486	5.4	2,323	12,497	3	1.7：1	3,872	3,646
隰	6	19,455	124,426	6.3	3,242	20,738	6	1：1	3,243	3,891
太原府	13	128,905	778,278	6.0	9,916	59,867	18	1：1.4	7,164	8,593
汾	5	59,450	320,230	5.4	11,890	64,046	12	1：2.4	4,954	5,943
泌	3	6,308	34,963	5.5	2,102	11,054	2	1.5：1	3,154	3,784
遼	4	9,882	54,580	5.5	2,470	21,001	3	1.3：1	3,294	3,952
嵐	4	16,748	84,006	5.0	4,187	21,002	1	4：1	16,748	19,096
石	5	14,294	66,935	4.7	2,859		2	2.5：1	7,147	8,575
忻	2	14,806	82,032	5.5	7,403	41,016	4	1：2	3,702	4,442
代	5	21,280	100,350	4.7	4,256	20,070	3	1.7：1	7,093	8,511
潞	10	68,391	388,661	5.7	6,839	38,866	(1) 7	1.4：1	9,770	11,724
澤	6	27,822	157,096	5.6	4,637	26,183	(5) 6	1：1	5,564	6,676
朔							2			
全道 領州		軍府數 163								
18		軍府州 16								

〔河 南 道〕

府州名	領縣	戸 數	口 數	口/戸	戸/縣	口/縣	軍府	縣:府	戸/府	丁/府
河南府	20	194,746	1,183,092	6.0	9,737	59,155	30	1縣1.5府	6,492	7,790
汝	7	69,374	273,756	3.9	9,911	39,108	4	1.7縣 1府	17,344	20,812
陝	6	30,958	170,238	5.5	5,159	28,372	15	1縣2.5府	2,064	2,477
號	6	28,249	88,845	3.1	4,708	14,807	4	1.5縣 1府		
鄭							(8)			
汴							(8)			
許							(8)			
全道	領州 29						軍府數 77 軍府州 7			

〔隴 右 道〕

州 名	領縣	戸 數	口 數	口/戸	戸/縣	口/縣	軍府	縣:府	戸/府	丁/府
秦	6	24,827	109,740	4.4	4,138	18,290	6	1:1	4,138	4,961
渭	4	6,425	24,520	3.8	1,606	6,130	5 (4)	(1:1)	1,285	1,542
蘭	2	2,889	14,226	4.9	1,445	7,113	2	1:1	1,445	1,734
洮	1	2,700	15,060	5.6	2,770	15,060	1	1:1	2,700	3,240
岷	3	4,325	23,441	5.4	1,442	7,814	3	1:1	1,442	1,730
疊	4	1,275	7,670	6.0	319	1,918	3 (2)	1.3:1	425	510 2丁として(850)
宕	2	1,190	7,199	6.0	595	3,599	2	1:1	595	714
涼	5	22,462	110,280	4.9	4,492	22,056	7 (6)		3,208	3,849
沙	2	4,265	16,250	3.8	2,133	8,125	3		1,422	1,706
瓜	2	477	4,987	10.5	239	2,494	1		239	286 2丁として(478)
郭							2			
甘							2			
西	5	19,016	49,476				(5)	1:1		
全道	領州 19						軍 府 42 軍府州 13			

一、二〇〇人、一、〇〇〇人、八〇〇人と籍兵の定員を規定されていた。今すべてを中府（一、〇〇〇人）と假定して各州一府當りの丁數に對する點兵率を試算してみよう。上中下府の分布は明らかではなく、或る州に上府のみがおかれ、或る州には下府のみが置かれるという可能性は無くはないが、この際無視するはかない。また、戸口統計から直接には丁男數は不明であるが、日野教授推算に従えば、平均一戸二丁程度と考えることができる。但し籍帳上の戸丁率は陰漏のため遙かに低く、天寶時の平均で一戸一・二丁前後とされている。新唐書地理志所載の天寶初の統計で、上位五道の一

〔河 北 道〕

州 名	領縣	戸 數	口 數	口/戸	戸/縣	口/縣	府	縣: 府	戸/府	丁/府
懷	5	55,349	318,126	5.7	11,070	63,625	補 8 (2)	1縣1.6府	6,917	8,303
魏	14	151,596	1,119,873	7.4	10,828	79,991	補 1	14縣 1府	151,596	181,195
博	6	101,142	590,196	5.8	16,857	98,366	補 2 (1)	3縣 1府	50,571	60,675
相	5	48,056	284,630	5.9	9,611	56,926	補 5	1: 1		
衡	6	91,666	683,280	7.5	15,278	11,388	補 1	6縣 1府	91,666	109,999
汝	8	63,454	395,238	6.2	7,932		補 1	8縣 1府	63,454	76,145
易	6	44,230	258,779	5.9	7,372	43,129	9	2縣1.5府	4,914	5,897
幽	9	67,242	371,312	5.5	7,471	55,220	補17 (4)	1縣 2府	3,955	4,746
平	3	3,113	25,086	8.0			1	3縣 1府	3,113	3,736
媽	1	2,263	11,584	5.1			1 (2)	1: 1		
檀	2	6,064	30,246	4.9			補 2	1: 1	3,032	3,638
薊 (開元18) (折幽州)	3	5,317	18,521	3.5			2	1.5縣 1府	2,659	3,090
營	1	997	3,789	3.8						
全道	領州 26						軍府數 46 軍府州	12		

〔綏 南 道〕

州 名	領縣	戸 數	口 數	口/戸	戸/縣	口/縣	府	縣: 府	戸/縣	丁/府
成都府	10	160,950	928,199		16,095	92,819	3	3.3縣: 1府	53,650	64,380
彭	4	55,922	357,387				2	2縣	27,961	33,554
蜀	4	56,577	390,694				3	1.3縣: 1	18,859	22,630
漢	5	69,005	308,203				1	5縣: 1	69,005	82,806
邛	7	42,107	190,327				1	7縣: 1	42,107	50,527
松	4	1,076	5,742		269	1,436	(1)	4縣: 1	1,076	1,281
扶							(2)			

戸平均口數は五・九乃至六・九人で大體六口程度の口數となるが、通典の掲げる天寶一八載の總口數五、二九二萬に對する課丁男八二〇萬は約六分一強に當る。しかしこの課丁は正しくは輸丁というべきで、見不輸を加えて考えるとき、一戸平均二丁と云う數の標準がかなりの時代的巾をもつて妥當するものと考へうる。各道州によつて戸口率と共に戸丁率にもかなり相違があつた如くで、一般に富裕な經濟的先進地帯ほど一州平均戸口數が多いのは勿論、一戸當り平均口數も大きく、反對に貧窮な後進地域ほど戸口率が低い事實が指摘されており、貧弱な州縣においては計帳に登載して稅役

配徴の基準となる戸數や丁口數を、恐らく實在數よりかなり少なく報告していたのではないがとの推測が下されている。こうした含みをもった統計數字を基礎として操作した結果については、一層問題があるが、暫く大勢をうかがう参考として許されるであらう。

以上の假定に立つて算出した一府當り丁數の結果を道別に比較通覽すると、隴右は一府當り平均四、〇〇〇丁以下、關内諸州の場合は率ね四、〇〇〇乃至五、〇〇〇丁當り一府、河東は八、〇〇〇丁以上に對し一府、河南は九、〇〇〇乃至一萬丁に對し一府、河北は五萬丁に一府程度という割合となる。すべて中府一、〇〇〇人として點兵率を算出すれば、關内諸州で概ね二、三丁に一兵乃至五丁に一兵、隴右諸州では二、三丁以下に對して一兵の割で、置かれた折衝府は下府、一戸は二丁以上としても、全丁男が充兵されたとしてやつと規定の兵員額を充しうるか否かという州さえ少くない。ところがこれに對し、河東諸州では三、四丁に一兵以上一〇丁に一兵迄で、概ね五、六丁に一兵程度、河南の州では八、二〇丁に一兵、河北にいたっては數十乃至百丁に對して一兵という點兵率を示す諸州が少くない。しかも前記の諸道が全道州數の九割以上に達する軍府州をかかえているのに、河北では二六州中一二州しか軍府をおかれていないのである。隴右等に於ては特に繁重な徭役の差遣に備えて州縣が手加減し、載籍戸口數や戸丁率を實際より低くしていたとも見られ、從つて二、三丁以下に對して一兵という比率は若干緩和されるのかもしれないが、他方括戸括丁が内地に比して嚴しくなかったとは云い切れない。いずれにせよ右の大勢は動かぬところであらう。これが單なる机上の計算のみでないことは西陲出土の古文書に徴しても傍證を得ることが出来る。

西村元佑氏は「唐代敦煌差科簿の研究」において「邊境に於ける兵役の重徴」に論及せられ、天寶六乃至一〇載の差科簿と考えられるペリオ文書第二六五七、二八〇三、三〇一八、三五五九號に就いて、見在總丁男對各種兵役（衛士・翊衛・土鎮兵）充役者の簡點率を算出表示せられた。それによると、敦煌地方では府兵の外に土鎮を加えて丁男の三六・六%乃至四五・五二%の點兵率に達しており、差科簿からは破除されている單身衛士・單身土鎮なる者の數を加算すると、

ある郷の如きは全郷健全丁男中の、實に七〇%の兵役服務者のあつたことをのべられた。また三八戸の全家兵役服務者の例をも挙げられている。この差科簿における衛士がいずれも高齢者で、彼等が成丁と同時に簡點されたと假定して年齢逆算を行うと、遅くとも開元十九年以後この地方での府兵簡點は中止され代つて土鎮兵の差充がその比重を増してきたものとされる如くである。そうとすればこの土鎮兵を召む點兵率、軍役を主として府兵によつて遂行せんとした時期の府兵點兵率とそれ程大きな差はないものと考えて誤りあるまい。府兵の簡點に當つては、高戸多丁戸優先の原則があつたが、敦煌の戸籍に現われる衛士はいずれも貧弱の下戸より入軍しているのもその點兵率の高さによるものであらう。また三丁に一丁を簡點率の限度とする定めが存在したようであるが、關隴諸州こそこの限度規定が重要な意味をもつ地域であり、當時この限度ぎりぎりの線まで徴兵が行われ、時にはその限度さえも無視することもある地域と考えられるのである。

繰返して云う様に、算出された數値そのものは假定の積み重ねの上に立っていて、唯一の論據として重視することは危険であるが、以上の載籍戸口數と軍府分布との對比によつて、府兵制の兵役負擔の地域的偏重がその恒常的體制において想像以上に大きく、一般の稅役負擔において河南・北が首位を占めたのに對し、軍役は隴右・關内・河東が専らその重壓を負擔するたてまえとなつていたことが看取される。この點を唐初に溯つて考えるとき、天寶初に大約二七〇に達した關内、一五〇の河東、三〇の隴右の軍府は、その殆んどが既に貞觀以來設けられていたと考えられ、府兵徵役の重點がこの三道に集中していたのは明らかである。ただ貞觀の戸口統計においては關内・河東は戸數において二位・五位であり、天寶において五、六位に降つてゐるのに比すればまだしも戸數とのバランスがとれていたかに見える。しかし戸口第一位の劍南、第三位の河北、第四位の嶺南が、いずれも殆んど府兵を供給してゐないばかりか、戸口率から云つて關内・河東・隴右はそれぞれ九、一二、一〇位に止つており、點兵率の偏重はやはり最初から甚しかった。ただ武后朝から玄宗朝前期へかけての、河南・北、江東・西、淮南の載籍戸數の激増によつて、全國の稅役負擔戸の分布が大きく變りつつあるときにも軍府布置の大勢には殆んど變化なく、僅かに東京周邊（河南）と幽州方面（河北）に若干軍府の増置を見た程度

で、戸口分布に對する地域的不均衡の程度はますます顯著になつたと云いうるのである。

二 軍府分布に關する諸説

右の如き軍役負擔・點兵率の偏重に對して、從來行われてきた説明は、「居重馭輕」によつて中央集權的統制力を強化せんとしたことの現われとするものであつた。これは單純明解で極めて常識的であるが、それだけに説得力もある。ただそこから、それ故にこそ唐朝の崩壞の要素が芽生えたことになる點は注意を要する。即ち集權的たらんとした結果、唐朝以來既に狹郷であつた關内に稅役兵役が加重され、この偏重が民生を破壞し、均田租庸調制と府兵制の崩壞を導いたとするのである。しかし、この偏重がそもそも設置當初からの制度であつたとすると、その結果としての崩壞はまたはじめから豫想されたものではなからうか。それを承知で強行せねばならなかつたのは何故であるか。しかもその分布は、同じ一道の中でも特定の州縣に偏つてゐる。それは徵兵母體たる戸口の分布に對して餘りにも均衡を失してはいないか。この點を問題としたのは谷霽光氏である。谷氏は概略次のようにのべた。即ち「折衝府地團の大小、兵府の分布は、戸口の多少と密接な關係があるが、設府の條件はただ政治的中心地帶を重視するだけでなく、地方の情勢をも考慮しており、軍事地理的な條件に従つてゐる。河北の府は契丹侵入に對しておかれ、安西都護府方面の府は西域經略に従つておかれた。こうした軍事地理的條件に加えて、その上に當時の戸口の多少を考慮した結果が、こうした不均等分布を生み出した」というのである。とすれば、窮極において唐朝の安定をつき崩したものは各地域の戸口數に應じた合理的負擔を不可能にした對外軍事情勢の壓力によるところが大きいと云わざるをえない。

これに對して、中央集權の意味を更に一步深化せしめ、軍府の配置にも唐朝國家の特徵的性格を讀みとらうとする見解がある。即ち岡崎文夫博士の「西北の武力と東南の財力との結合による支配」という特徴づけがあり、また陳寅恪氏の「關隴貴族集團による關中本位政策」という性格規定が存する。これらの見解は、軍府の配置が單に京師が長安におかれ

たという偶然的地理條件や、外夷の入寇等の國防上の必要からばかりでなく、そのような結果以前の、むしろ唐朝統治集團の本質的性格から生れ出た明確な政策的意圖の表現として考え、そこに唐朝の全國支配のもつ意味を考えようとする點で一致している。もしそうであるとすれば、そのような根本的政策意圖は、軍制に限らず唐朝のあらゆる制度や施策の中に潜在し、その方向を規定している筈である。我々は右の推論を手掛りとしてこの問題を更に深く洞察できるであらう。實際に陳氏は、彼のいわゆる「關中本位政策」をば、唐朝の「氏族」政策、豪族對策等の中に追求した。

しかしこうした本質論に入る以前に、現象としての軍府の分布を、今少し分析的に眺めておく必要がある。この點に關し、全く新たな角度から鋭く切り込んで、府兵制の本質を解明しようと企てたのが岑仲勉氏であつた。^⑤岑氏の論は、直接には谷霽光氏の見解を俗論として批判する所から出發する。即ち前述の谷氏の説明によつては解き得ない次の如き諸點を擧げるのである。

- (1) 軍府の設置は、實は全く一般戸口の分布に對應しておかれたのではない。
- (2) 軍府の分布は、また必ずしも各地方の政治的・軍事的的重要性、ないしは軍事地理とは合致しない。唐にとつての外敵は、(イ)西南の吐蕃、(ロ)北の突厥、および(ハ)東北の奚・契丹である。ところが西南と東北は軍府が最も少く、實際吐蕃の侵入路に當つた諸州にも布置されてはいない。むしろ、關内は勿論としても、河東および河北・河南の一部内地に多い。その理由は何故であるか。單に京畿中心というだけでは不充分である。
- (3) しかも各道の軍府數が相い懸絶していて、關中があまりにも多い理由、また河東が東都洛陽を擁する河南に比して倍以上の軍府をおかれている理由が充分説明されえない。
- (4) 嶺南・江南等において、數多ある州の中で特に或る州にのみ、五、六箇の軍府がおかれた所以は何であるか。
- (5) 同一道内で軍府州と非軍府州が分かれ、また軍府州相互の間においても極めて軍府の分布に疏密の差が甚しい。これは何故であるか。

以上の疑問は、さきに筆者が検討したところに照らしても、まことにもつともな疑問であり、谷氏を含めて従来の所説がこの疑問に答え得ないとする批判も肯綮に中ついていると云うべきであらう。而してこれに對する岑氏の解答は、また獨特なものである。即ち一言にして云えば、唐の府兵制は決して一般民丁を對象とする徵兵制ではなく、特殊な「府兵戸」を對象とする一種の世襲兵制（兵戸制）であり、軍府州とは正しくかかる府兵戸の配隸せられていた州であつて、一般戸の分布とは關係なく、「府兵戸」の分布に對して置かれたものであつたからこそ、軍府布置の道別偏差、同一道内での各州間の甚しい疏密の偏差、さらに特定州のみが軍府州に指定されるという現象が起つたのであると解するのである。然らばその「府兵戸」とは如何なる戸で、何故天下諸州にこのような分布をみせて散居するに到つたのであるか。岑氏によれば、彼等こそは高祖が太原に舉兵して以來、中原入關、群雄平定戰に隨從した太原元從軍の後裔に他ならない。彼等は武徳のとき、願留宿衛者三萬（新唐書兵志による。玉海所引鄭公家傳作六萬）を留めて京師近傍に安挿せるほかは、解甲歸田せしめられたが、その際の數や地域は一々史籍に詳載されてはいない。しかし必ずや先ず現在地たる關中一圓に地着し、次いで舉兵の地河北に本貫を有してここに歸郷する者が多く、更に一部、河南北、江南等に本貫を有し、そこに歸田せる者もあつたと思われる。京兆府と近畿諸州は願留宿衛者三萬をも府兵として受入れたため、特に懸絶して多數の府兵戸をかかえ、軍府の集置せられる所となつた。府兵戸は、隋制にない、籍を州縣に入れつつも軍府の統領すること前の如くしたのであり、こうして州と軍府との連繫をもたされた州が軍府州である。軍府管下の府兵戸の住域は縣の界分とは別に折衝府の「地團」とされ、彼等は父子兄弟より定員の缺額を補充していったものであらう。ただし府兵某が死去してもその子弟に補充者を見出し難いときに、軍府州の一般民、特に同郷人が撰充されて府兵となる可能性を有したにすぎない。かく解してこそ、折衝府が何故に終始一所に固着して設けられ、毎府の兵數が固定されていたかという點も説明しうる。更に入京宿衛が府兵の主要任務の一とされたのも、それが元從軍であつたことから生じたものと解せられる、と云われるのである。まことに大膽なる假説であり、なるほど岑氏の如き假定に立つて解釋すると、始めに氏の提出した諸疑問は氷解する。しかし

し然りとすれば我々の從來府兵制について抱いていた常識はもとより、唐宋以來の歴代史家の見解もその殆んどが誤っていたことになるであらう。^⑥果してそうであらうか。

これを検討するために、我々は次のことを明らかにしてゆく必要がある。

- (1) 唐朝創業期における兵制と、所謂府兵制度の成立過程——就中太原元隨軍との關係
- (2) 軍府州指定地域の諸條件——特に非軍府州との對比において
- (3) 軍府布置の意義についての總合的考察

右の課題のうち(1)に關しては、既に舊稿においてある程度明らかにしたので今は省くが、つけ加えてのべておくと、次の諸點をあげうるであらう。

第一に、岑氏の見解は全くの臆測にすぎず、根據となる史料に缺けている。第二に、太原起義軍參加の元從士卒が果してそれ程天下各地の人間を含んでいた可能性があるか。これは大勢論としてであるが、否定的見解に傾かざるをえない。

第三に、いわゆる府兵制の發展は、大勢上兵戶制の解消、一般民丁への番役化を志向してきたのは紛れないところで、唐における制度はやはり一般民丁中よりの簡點であつたとするのが合理的である。第四に、それを裏付けるものとして、武德令以來、唐令の體系で軍防令は、賦役令・田令・戶令等と不可分の一セツトとして公布施行されてきた。特に府兵戶なるものが別扱いされた例はなく、一般民丁の稅役體系の中で一般課丁男の簡點入軍に伴う問題が、課・不課の範疇ではなく、課丁現不輸、免課の範疇の中で處理されている。而してそのことは敦煌出土戶籍における衛士の記載にも明證の存するところである。かくて結論として「府兵戶」の存在を假定する岑氏の解釋を支持することは不可能である。しかし岑氏の説を否定しても、岑氏の指摘した疑問については、我々は別の解答を用意することを迫られる。それに答えるために第(2)の問題、所謂軍府州とせられた諸州が如何なる地域的特殊性を有していたかを考察してみたい。

第三表 華南諸道軍府州沿革表 [() 内ハ新唐書地理志ニヨル]

道名	總府數	軍府州名	戸	府數	府名	州沿革
山南東	(10)14	江陵府(荊州)	3萬	(1)1	羅含	武德5大總管府, 7大都督府
		峽(峽)州		(0)1	夷陵	武德2平蕭銑置〔隋以來夷陵府アリ〕
		襄州		(1)1	東陽	隋置, 武德2總管府, 貞觀14都督府
		襄州	4萬	(1)2	漢津	武德4平王世充, 山南道行臺, 7罷行臺, 爲都督府
		鄧城			鄧城	武德1置(隋ノ房陵郡)
		房州	1萬	(1)1	至成	武德1置, 3總管
		金州	1萬	(1)1	洪義	府武德1, 梁州總管府, 7改爲都督府
		梁州		(1)4	光義	
山南西		利州	1萬	(0)1	嘉川	武德2總管府, 7都督府
		鳳州		(1)1	歸昌	武德1置
		文州		(0)1	□平	
劍南	(10)13	成都府	16萬	(3)3	威遠, 歸德, 二江	武德3益州大行臺, 總管府
		彭州	5萬	(2)2	天水, 唐興	垂拱2, 益州ヨリ分置
		蜀州	5萬	(3)3	金暉, 唐隆, 灌口	
		漢州	6萬	(1)1	玉津	武德ノトキ雅州ヨリ析置
		瑯州	4萬	(1)1	興化	都督府, 文州, 扶州ヨリ析置
		松州	1千	(0)1	交川	
		扶州		(0)2	安川, 會川	
淮南	(6)10	揚州	7萬	(4)4	邗江	武德3東南道行臺, 9大都督府
	玉海云, 唐兵府630余	和州	2萬	(1)3	江平, 新林, 方山	武德2, 總管府(杜伏威歸國置)7, 都督府
	江淮兩道不過8, 9	壽州	3萬	(0)1	新川, 和川, 香林	
	唐志江淮兩道計8考補15	安州	2萬	(1)2	安城	武德4, 總管府(平王世充置)
					義安, 寶城	
江南東	(2)5	越州		(1)1	浦陽	武德4, 總管府(平李子通置)
		溫州		(0)1	三州	隋永嘉郡, 唐置嘉州・括州, 括州置總管府
江南西		福州		(0)1	泉山	都督府
		潭州		(1)1	長沙	武德4, 總管府(平蕭銑置)
		吉州		(0)1	永泰	隸洪州總管府下(平林子弘置)
嶺南	(3)6	廣州		(2)2	絞南, 番禺	武德4總管府
		貴州		(1)1	龍山	武德4, 尹州總管府
		桂州		(0)1	淮南	武德3.9(4)總管
		澄州		(0)1	上林	武德3.9置
		潘州		(0)1	潘水	

三 華南諸道における

軍府州の條件

特定州が何故軍府州に指定されたかを考察するに當って、一道の大部分が軍府州で、ただ各州内に設置された軍府の數に若干の多少の差、不均があるに止るような地方、關内、河東、隴右の如き諸道よりは、むしろ特に問題となるのは、一道全體として見れば殆んど軍府を置かれていないような地方、淮南、江南、嶺南、劍南、黔中諸道における軍府州の場合であろう。かかる華中・華南の軍府州名を拾って一括表示すれば

次表の如くである（第三表）。果してこれらの州が軍府州とせられたについて、何等か通共せる事由を推知できるであろうか。

先ずこれらの州は、兩唐書地理志による限り、各道内の戸口分布においては決して上位を争う要會ばかりとは云い難く、ここでも兵府の分布は戸口の分布とはほぼ無關係と云いうる。例えば劔南道には戸數六萬を算する梓・縣州、淮南道には戸數四萬の廬州、三萬の舒州等があるが、いずれも軍府州とはされていない。

次に地圖を案じて交通路等、地理的條件を眺めて見ても、それらの大多數を含むが如き特記すべき條件は何も見出すことはできない。

とすれば、残るところはこれらの州の沿革それ自體に何らか特色が認められるかという點にしばらくあろう。この點こそはまた、岑氏が自説に根據を與えんとすれば當然行つて然るべき檢討手續きでもあつた。岑氏の立論が杜撰の評を免れないのもこうした追究を怠つた點にある。兩唐書地理志・元和郡縣志等の記載を參照して、これら諸州の沿革で何か目につくことがあるかと云うに、少くともそれは一つある。即ち、これらの州の半數以上（三一州中一九州）が、嘗て武德・貞觀の際、行臺・總管府・都督府を設置された州であることである。一見然らざる州の中でも一二州中四州は前記の州から後年析置せられたことが明らかである。例えば江西の吉州の如き、舊隋の廬陵郡で武德五年林士弘を討平して吉州を置いた。吉州には總管府はおかれなかったが、しかしこのとき豫章郡に洪州總管府をおき、吉州はその隸下の最有力州であつた。残る八州中一つは隋以來の軍府らしく、七州は不明であるがそのうち二州からは逆に都督府が析置されている。華南諸道の軍府州は、その大部分が武德・貞觀の際に總管府・都督府の設置を見た州であるとすれば、それが恐らくこれらの州の軍府設置理由と推測しても大過あるまい。然らば逆に、嘗て同じく總管府・都督府を設置せられた州でありながら、後年折衝府を置かれなかった州はないであろうか。これを檢すると確かに若干例を發見できる。しかしそれらの州にはまた共通する特徴がある。例えば、江南西道の江州は隋の九江郡の地で、武德五年に總管府（後都督府と改稱）を

おかれたが、貞觀元年に都督府を罷められ、同じく洪州の場合は、武德五年林子弘を平げて洪州總管府がおかれ、後ち、洪州自身は非軍府州となつたが、嘗て洪州總管府下に隸していた吉州の方が軍府州とされている。同じく宣州は隋の宣城郡の地、武德三年杜伏威が歸順して宣州總管府がおかれ、同六年一時輔公祐に占領されたが七年回復し、改めて宣州都督府をおかれたものの、貞觀元年都督府廢止と共に屬縣を揚州（軍府州）に割屬している。その他江州の場合は、武德五年總管府をおかれたが貞觀五年廢止、淮南道の光州・黃州も武德三年總管府を設置したが貞觀元年省かれ、山南の鄧州は武德三年總管府を設置したが、翌四年には廢して山南行臺に隸せしめ、唐州は武德四年總管（顯州）をおき七年都督府に改稱したもの貞觀元年には廢罷している。以上の如く、嘗て總管（都督）府を設置されながら後年軍府州とされなかった諸州は、いずれも、武德末・貞觀初年までに府を廢罷せられるか、或は自ら軍府州とされる代りに管下の有力州の方が軍府州とされているのであって、ここに總管・都督府、特に貞觀年間に入つてのその布置と、折衝府の設置とが密接な關係のあることは略々疑ないところとなつた。なお總管府との關係を明確に立證し得ない諸州においても、それらがいずれも武德初年の創置にかかる州であること、即ち換言すればいちはやく隋末の群雄の支配を脱して唐朝への歸屬が明らかとなつた州であることは注目しておいてよからう。

四 總管府（都督府）制度の展開と府兵制

周知の如く、唐は國初の國內平定戰に當つて、服屬地に大總管府或は總管府を設けて數州の軍政を管せしめ、更にその上に大行臺または行臺を置いて、軍政の最高權限を付與し、以て大統一に先んずる地域ブロックごとの統一を促進せしめた。襄州道行臺を齊王元吉に、東南道行臺を杜伏威に委ねたほかは、陝東道大行臺をはじめ山東道、益州道等の行臺尙書令は秦王世民が兼ね、やがて世民の登極によってその使命は終り、武德末年を以てすべて廢されるのであるが、總管府はその數も多く、武德七年都督府と改名されて數を減じつつも、後ちまでその形骸を止め、換骨脱胎しつつも唐の地方制

度上に機能を果しつつけることとなる。その詳細は別に專論を必要とするが、今、必要な範圍において一瞥を與えることとする。

(イ) 北周の總管府

總管は、北周書明帝紀、武成元年春正月條に傳える如く、魏晉以來發展し來つて北朝にも行われた都督諸州軍事を改名したものに始まる。しかしそれと同時に、都督諸州軍事以外のさまざまな都督職が散官化の傾向を強め、領兵都督と領兵都督の區別が行われ、領兵者には特に職名としての總管を加えることが行われるようになった如くである。元來軍隊を統督するという意味の語から生れた軍職名である都督には、上下に亘り任務を異にする多くの階級が分かれ、各々識別のための稱號を冠せられていたが、上は數州の軍事を領し兼ねて一州の民政をも理する州鎮長官や、大軍征討の最高方面軍指令官としての行軍の使持節大都督將軍、下は行伍列間の將校、部隊指揮官としての大都督・帥都督・都督等までがあった。それらに對應して總管と呼ばれるようになったものも同様に、州鎮長官としての州總管、行軍指令官としての大總管、一軍團長としての總管、單なる將校としての子總管などを含んでいたのである。州鎮長官たる總管は、都督同様、使持節・持節の稱號を加えられ將軍號をも帶し、從來の都督區を總管區として統轄し、都督府を繼承する總管府の幕僚を置いた。北魏末には將軍號を帶する都督刺史は州府のほかに將軍府と都督府をも開き、三系列の吏僚を擁していたが、北周では軍府は總管府のみに統合し、別に將軍府を開かしめなかつた。勿論その治所や管域は固定不變のものではなく、必要に應じて變更を被り、總管に任ぜられる人物の如何によつても改變を加えられたのであるが、その大要は嚴耕望氏の大著^⑧に詳記せられている。しかしそれによると、北魏時代の都督區が極めて不安定であつたのに比し遙かに固定的となり、南朝や東魏の都督區同様、略々定型化している。同時にそれは巡屬の刺史に對する軍事以外の統制權も強力化し、中央と州郡縣との中間機關としての地位を強めていたようである。軍事的には刺史を通じて管下諸州の州兵を統制すると共に、管内の防（北魏以來の鎮と同じ）・戍を直轄した。都督時代、帳内・防城等の各種都督、統軍・幢主・隊主等がその下にあ

ったが、都督に總管の職名が與えられたほかは同様であつた。防・戍の兵は勿論、州兵も基本的には軍防に集居する軍人兵戸から出た。これらの軍兵を總稱して、中央の禁衛軍および丞相府の二十四軍（儀同府兵）を含めた中軍に對し、外軍と呼んだのである。總管府は當時においてはいわゆる「府兵」とは關係なく、總管府の兵という意味での府兵を統轄したにすぎなかつた。

いわゆる「府兵」、西魏以來の二十四軍を構成する開府儀同三司府の兵は、武帝の建德三年十二月の改制によつて丞相府あるいは中外府直屬軍としての地位から皇帝の近衛軍の列に加えられ、近衛に上番宿衛するに到っていたが、舊來の禁軍とは區別され、それ自身獨自の統轄系統をなしていた。宿衛の制度は建德元年に改置を見たが、三年末二十四軍の増強擴大と府兵の宿衛上番を決定すると共に四年に入つて更に整備増設がはかられた。金石萃編^{卷六}唐苗神客撰「乙速孤神慶碑」(一)内、潛研堂金石文跋尾および八瓊室金石補正卷四〇にて補う)に、

祖安〔齊〕前鋒都督、周右武侯〔右六〕府驃騎將軍開府儀同三司。

とある。この左(右)武侯については隋の十六衛中の武侯衛に連續することは疑いないものの、建德初までに成立する北周の定制、左右宮伯、左右武伯、左右司武、左右司衛の中には見えないので隋制の混入かと疑う向きもあつた。だが、續高僧傳^{卷九}釋法藏傳に、

宣帝大象元年(580)九月下山謁帝、意崇三寶、到城南門、以不許入、進退論理、武侯府上大夫拓王猛、次大夫乙婁謙問、從何而來、朋儔何在、施主是誰。

とあり、虜姓乙婁謙は漢名伊彥恭で、隋書^{卷四}伊婁謙傳および文帝紀開皇元年二月條によると、隋文帝の受禪によつて左武侯大將軍に昇せられている。少くとも周宣帝時代には既に武侯衛が存し、二十四軍を構成する驃騎將軍開府儀同の統轄する開府(驃騎)府兵が各衛に分屬せしめられ、左右に分けて左(右)一府、二府、三府と番號を付けられていたのがわかる。かかる體制が成立した時期は明確にし難いが、建德四年(585)以後大象元年(586)以前の時期であろうことは略

略疑ない。金石萃編^{卷三}九 陳茂碑に北周末大將軍府掾治右十二府長史を歷任し、開皇元年右衛府長史に除せられたとあるのもその一例である。隋書^{卷八}二 百官志下に、

左右衛掌宮掖禁禦、督攝仗衛、(中略)左右衛又各統親衛、置開府、(左勳衛開府、左翊一開府、二開府、三開府、四開府、及武衛、武候、領軍、東宮領兵開府準此)府置開府一人、(中略)又有儀同府、儀同以下置員同開府、但無行參軍員、諸府皆領軍坊、每坊置坊主一人、佐二人、云々。

とある隋制は、周制をそのまま受けたものと見て差支えない。開府府は元來西魏宇文泰の丞相府軍時代、各一軍を領して二府宛使持節十二大將軍大都督に隸し、二十四軍を構成していたものである。しかし周初宇文護專權時代に各軍を増募によつて擴大し、數開府を以て一軍を構成するように更め、擴大された一軍の統轄者は一級上の使持節大將軍都督を以てせしめ、その職名をば總管と定めたのである。^⑨文苑英華^{卷九}〇五 庾信「周柱國大將軍爾綿永神道碑」に、

其年(保定四年(564))、授使持節大將軍都督・治左八軍、總管軍事、(中略)天和二年(中略)又任左廂第三軍總管、仍被勅、將兵馬北道教習。

とあり、周書^{卷三}六 段永傳に、

保定四年拜大將軍、(中略)天和四年授小司寇、尋爲右二軍總管、率兵北道講武。

とある。恐らく諸府は、平時においては各々配屬せしめられた近衛府に兵を上番せしめるが、行兵・講武の出陣に當つては使持節大將軍都督を以て各一軍の總管に任命し、二十四總管に率いられる左右廂二十四軍に編成されることとなつたのであらう。即ち中軍を構成する二十四軍も、その出陣行軍に際しての指揮官は總管と呼ばれていたのであつて、これら行軍の總管も當然その任務遂行期間中は所定の幕僚を置いたのである。ここに、州鎮總管とは別の系統において、いわゆる「府兵」即ち驃騎將軍開府儀同三司、車騎將軍儀同三司の軍府に隸し中央直屬の二十四軍を構成する軍坊の兵も、やはり總管を以て統轄される體制となつていたのである。

建德四年(575)北周は中外軍を動員して北齊を伐った。周書^{卷六}武帝紀同年七月丁丑條に、

以柱國陳王純爲前一軍總管、榮陽公司馬消難爲前二軍總管、鄭國公達奚麗爲前三軍總管、越王盛爲後一軍總管、周昌公侯莫陳瓊爲後二軍總管、趙王招爲後三軍總管、齊王憲率衆二萬、趣黎陽、隨國公楊堅・廣寧侯薛迴、舟師三萬、自渭入河、柱國梁國公侯莫陳芮率衆一萬、守太行道、申國公李穆帥衆三萬、守河陽道、常山公于翼帥衆二萬、出陳汝、壬午、上親率六軍、衆六萬、直指河陰。

とあり、その軍は禁衛六軍(武賁・旅賁・射聲・驍騎・羽林・游擊)を中軍とし、前三軍・後三軍の六行軍總管に帥られる主力軍一七萬から成っていたが、翌五年(576)十月滅齊の師も、

已酉、帝總戎東伐、以越王盛爲右一軍總管、杞國公亮爲右二軍總管、隋國公楊堅爲右三軍總管、譙王儉爲左一軍總管、大將軍寶泰爲左二軍總管、廣化公丘崇爲左三軍總管、齊王憲・陳王純爲前軍(總管)云々。

とあってやはり二總管の帥いる前軍と親統の中軍および左右各三軍總管によって帥いられていることがわかる。これより先、周書^{卷一}晉陽公護傳および^{卷五}武帝紀上に、

(保元四年)於是發二十四軍及左右廂散隸及秦隴巴蜀之兵諸蕃國之衆二十萬人、(中略)至潼關、乃遣柱國尉遲迴、率精兵十萬爲前鋒、大將軍權景宣率山南之兵。

とあり、同二年六月己亥條に、

分山南、荊州安州襄州江陵爲四總管、(中略)(四年十月)大將軍權景宣、率山南諸軍。

とあって、保定四年の東征軍が二十四軍府兵を中核に、各總管府兵を混えて編成されたように、建德四、五年の東征軍も禁衛の六軍、二十四軍を以て中軍を形成し、外州總管府の外軍を以て前後左右の行營に配したものであったろう。先掲行軍諸總管のうち當時の現職の判明するものを挙げると、陳王純が陝州總管、達奚震金州總管十一州九防軍事金州刺史、侯莫陳瓊秦州總管、李穆原州總管、于翼安隨等六州五防諸軍事安州總管、譙王儉益州總管で右の推測を援けている。

かくて平齊の役が終ると、舊北齊領を含めて新たに州鎮としての總管府の再配置が行われることとなった。北齊の河陽行臺を繼いで河陽及洛懷等九州を管する河陽總管をはじめ、相州總管、定州總管、幽州總管、豫州總管、南兗（毫）州總管、青州總管、徐州總管府等がおかれ、こうして擴大された總管府の兵は當初は來征した行軍諸總管麾下の北周中外軍の駐留兵であつたに違ひない。しかし戰後處理の段階を終り、華北の本格的統一に進むにつれ、それぞれの管内において新たな兵源を創出せねばならなかつた。その中には新たに洛陽に建設された東京の警衛のための兵も含まれる。かくて宣帝嗣位の宣政元年（578）から翌大成（大象）元年（579）にかけて、相州六府を移して東京府となしたのをはじめ、在來の諸軍府を含めて大巾な再編が行われた。その結果注目すべきは、從來の中軍、二十四軍に準じて、外軍たる總管府においても開府儀同三司・儀司三司の開府府、儀同府を設けて軍士の統御に任ぜしめることとした點である。周書^{卷三}于翼傳に、

（平齊後）尋即除洛懷等九州諸軍事河陽總管、尋徙豫州總管、給兵五千人馬千疋、以之鎮、并配開府及儀同等二十人、仍勅、河陽襄州安州荊州泗州總管內有武幹者、任翼徵牒、不限多少、儀同以下官爵承制、先授後聞。

とあるのはその一例であるが、以後儀同に任ぜられるものは特に多く、儀同府を以て領兵せしめられる軍府が廣く設置せられて總管府に兵を供給する體制となつていたのであり、ここに總管府はいわゆる「府兵」制との結合を見ることがなつた。しかし時に北周朝の實權は既に着々と隨國公楊堅の手中に握られつつあつたのである。やがて楊堅の篡位の意志が明らかになると、相州總管尉遲迥は弟子の青州總管尉遲勤と連繫し、所管の相衛黎毛洛貝趙冀瀛滄青膠光莒の諸州を擧げて兵を起した。周書^{卷二}司馬消難傳に、

出爲交州總管、隋文帝輔政、消難既聞、蜀公（尉遲）迥不受代、遂欲與迥合勢、亦舉兵應之、以開府田廣等爲腹心、殺總管（府）長史侯莫陳杲、邳州刺史蔡澤等四十餘人、所管邳隨溫應土順沔環岳九州、魯山・甌山・沌陽・應城・平靖・武陽・上明・須水八鎮、並從之。

とあつて、これに呼應した交州總管が所管の九州八鎮を率いて舉兵したことを傳えるが、その幕下にも多くの開府がいた

ことを記している。總管府長史等は恐らく中央より添差されていたものであろう。

(ロ) 隋の總管府

假黃鉞・使持節大丞相・都督中外諸軍事（總知中外兵馬事）より進んで登極した楊堅は、宮廷革命によって北周の支配體制をそのまま引き繼いだ。北周の宿將尉遲迥の反亂と敗死、次いで韋孝寬の死をめぐって、人事面では勿論多少の入れ換えは免れなかったが、開皇初期の中外軍は共に北周の延長であった。北周末に置かれていた總管府の多くは、そのまま隋に引き繼がれたのである。また北周における禁軍宿衛の制も引き繼がれた。しかしまた隋朝になってから二、三の重要な改變があつたことも見逃してはならない。先ず第一は近衛の整理である。西魏北周以來の禁兵の系統には、もともと北魏以來の禁兵親軍たる領軍將軍下の左右衛・領左右（羽林・虎賁）あるいは宮伯・武伯隸下に屬する直閤・直寢・直齋・千牛備身・備身左右等があり、やがて丞相府軍たりし二十四軍を禁軍に編入上番せしめることとなって司武・司衛の侍官が設けられた。これは次第に擴大され、周末には左右武衛、左右武侯等が置かれていた。隋の文帝はこれらを整理統一して二系統を混一し、左右衛・左右武衛・左右武侯府・左右領左右府・左右監門府・左右領軍府の四衛八府とし、計十二衛府の制を確立したのである。勿論未だ嘗ての内外宿衛軍の區別を残し、後の三衛内府に連なる内衛と、外府の兵を統轄する外軍の呼稱があつたが、これによって中軍における禁軍と二十四軍との二本建ての複雑さは解消し、左右十二衛府の大將軍が皇帝に直屬し、その下に各二人の將軍があり、その下に驍騎將軍開府儀同三司（領兵開府）、車騎將軍儀同三司（領兵儀同）が配屬されるという衛府制度の大綱が確立した。衛府の名稱はその後變遷を見るとはいえ、内府・外府の上番衛士（侍官）を統轄して宮殿都城の警衛に當る原則は變りない。これと關連して、隋に入ってから北周時代にもまして急激な軍府の増設を見たことが擧げられる。「漢魏南北朝墓誌集釋」第五冊、圖版五〇二「范安貴墓志銘」に、

開皇三年起家、爲都督、尋轉爲帥（帥）都督、累統禁兵、（中略）授開府儀同三司、俄入爲右領軍右二驍騎將軍。

とあつて、先掲の北周以來の近衛と軍府の關係が受け繼がれ、十二衛府に分屬せしめられた軍府に一二三と番號が付せら

れていたことを知りうるが、金石萃編卷六唐「乙速孤神慶碑」には、隋開皇の制を襲った武德初年のこととして、

父晟、皇朝上開府、「右」武〔侯右〕廿府車騎將軍、轉驃騎將軍。

とあり、同卷七「乙速孤行儼碑」にも、

祖晟、皇朝上開府、右武侯右廿府左車騎將軍。

とある。驃騎將軍開府儀同三司、車騎將軍儀同三司は、西魏以來略稱するに開府、儀同といわれ、軍府については開府、儀同府といわれてきた。隋初においてもそうであったことは隋書百官志の前掲條（一九頁）にも明らかであるが、それが何時からか驃騎・車騎を以て略稱することと變っている。通典卷二職官折衝府條では、「隋開皇中、置驃騎將軍府、每府置驃騎車騎二將軍」と言い、單に開皇中のこととしているが、隋書文帝紀開皇十七年十月詔に、

頒銅獸符於驃騎車騎府。

とあって、開皇十七年ないしはそれを遡ること遠からざる時期、少くとも開皇中期頃からかと思われる。右の碑に見える右武侯右廿府左車騎將軍の呼稱に照すと、一衛府にして少くも二〇府の軍府を領し、車騎は左右二員で驃騎の副となっていたのであろう。この武德の制がそのまま開皇の制を示すものではないとしても、ともかくこの頃になると、一衛府にして相當數の軍府を領するに到っていたと考えて大過あるまい。この軍府の増設に當つては、新たに民戸を軍籍に入れる場合もあつたことは勿論、禁衛軍組織の一元化に伴つて從來儀同府（即ち驃騎車騎府）以外の統屬關係にあつた軍坊の兵をも、すべて驃騎車騎府によつて統轄する體制に改編することも進められたに違いない。

然らば北周代の外軍、地方の總管府とその軍兵、特に新設の開府・儀同府との關係はどうなつたであらうか。隋は開皇の初より着々天下統一の準備を整え、特に開皇三年の大改革を経て國力充實を見、四、五年に到ると内外情勢はとみに安定を示し、準備成つて八年十月大舉南下を開始し、九年正月早くも滅陳の大局を決定した。この間、滅陳の準備段階から對陳前進據點として總管府を増設し、やがて江南を平定する過程でまたこれを増設し、その結果總管府の總數は六〇餘に

達した。勿論一方で廢罷されるものもあり、同時に存在した數はもっと少い。それらは上中下三等に分たれたというが、今日詳考する手掛りはなく不明な點が多いが、既に統一過程の一應の終了と共に一部廢罷を見、開皇末から仁壽年間には約三六府程になっていたようである。隋の總管府に關しては、山崎宏博士の研究があり、主として設置州名と總管就任者を明らかにされ、分布の大勢をのべられている。筆者とは些か視點を異にするため二、三付け加えねばならぬ點があるが、幸にして利用しうる點はこれを参照して略述する。

先ず總管府の分布であるが、それは關中をはじめ華北地域では略々北周の舊を襲っているものの、若干の地域で外周に向つて擴大した。即ち特に目立つのは、西北では蘭州等を加えたに止るが、北方および東北方で、雲（榆關）・豐・朔・營・西汾（隰）・代・玄州總管府が加わつたことである。突厥の脅威に代つて高句麗問題がその對外戰略に大きく登場し初めることと表裏するものであらう。次に華南に目を向ければ、第一群として南寧、汝（會）・疊・潭・遂・瀘の諸州がある。これらはいずれも西南蠻や南夷に對する鎮定が課題に上つたことと對應している。そして第二群は、まさに滅陳の前進基地および滅陳後舊南朝治下の領域を制壓するために設けられた吳（揚）・壽・廬・吳（越）・洪・桂・循・廣・杭等の總管府である。これらを通觀して云えることは、先ずそれが長安を中心とする關中の中心部を除いて、その外周に設けられ、隋の版圖の擴大につれて外に向つて増置されて行つたものであることである。これは關中の中心部が主として軍兵の供給地であるのに對し、總管府の設けられた地域がむしろ關中から送られてきた軍隊を以て鎮護に任じ作戰を行う用兵の地たるを示している。この事は後に、唐代において都督府と改稱せられ且つ整理を被つたとき、専ら邊境にこれが残され、その軍事的任務として烽侯・鎮戍・關津等、府兵の防人を配備せられる機關を統督する役割を残されたのに連なるものといえるであらう。關中の中心部は、西魏以來關中政權の軍役徵發體制が根を下し、特に北周において京師を中心に多數の軍坊を集中的に設置し、隋に入つて更に大規模な軍府（驃騎・車騎府）の増置を見た地域であつて、外周地域に軍將を派遣し、新たに總管府を創置するに當つてこれら關内の府兵の一部が派駐せしめられたであらうことは容易に想像され

る。隋書^{卷六} 張定和傳に、

張定和、字處謐、京兆萬年人也、少貧賤有志節、初爲侍官、會平陳之役、定和當從征、無以自給、其妻有嫁時衣服、定和將鬻之、妻斬固不與、定和於是遂行、以功拜儀同、賜帛千匹、遂棄其妻、是後數以軍功、加上開府驃騎將軍、從上柱國李充擊突厥、(中略)煬帝嗣位、(中略)拜左屯衛大將軍。

とあり、平陳の行軍の主力はやはり關中の府兵であつたことを證している。而して山崎氏が明らかにされた如く、隋の總管府を統轄した者は、隋室の親王および北周以來の將領が殆んどで、被占領地の江南出身者は勿論、舊北齊出身の武將も算うるに足りない。このことは總管府がすべて中央直派の總管によつて占められ、隋朝支配力の浸透の據點であつたことを示すと共に、特に軍府増設の行われた開皇中期以降になつて華南等に設けられた總管府においては、創置時期の軍兵の中核がやはり關中から直派された府兵であつたことを想像せしめるのである。

しかしひとたび總管府が固定され常駐體制が施かれれば、臨時の行軍と違つて何時までも關内からの中央軍の派兵に頼るわけにはゆかない。總管府の使命は何よりも現地において管下數州の州兵を統御するにあつた。しかしこれらの州兵が頼りにするに足りないか、或いは嘗ての敵國でむしろ占領支配の對象として削弱すべきものであるような地域では、總管府は自己に直屬する新たな兵源を設けなければならなかつた。既に北周において、平齊後の東部諸州に設けられた總管府がその隸下に新置の軍府(開府府・儀同府)を有したことを見て來たが、平陳役前後の隋においても事情は全く同様であつた。「漢魏南北朝墓誌集釋」第五冊、圖版四八八「唐該豐妻蘇洪委墓誌銘」に、

洎開皇之初、將定江表、首置軍府、妙選英傑、君以材雄入幕、豪勝知名、遠江所推、特授都督、既而教兵不棄、治兵有典、富貴自取、仍領帥都督。

とあつて、滅陳準備の過程において、南邊地帶に軍府を新置したことを傳えている。この軍府は、文中都督・帥都督の官に任じたことをのべているので、儀同府と斷じて誤らない。この人物が「以材雄入幕、豪勝知名、遠近所推」とあるとこ

るから、谷霽光氏はいわゆる郷帥として郷兵を率いたものとされ、郷兵を編成することによっていわゆる「府兵」を擴大したものとされている。^③筆者も別に論じた如くたしかに當時舊北齊治下の南境に郷兵が組織せられ、地方勢力の郷里部曲を中央化してゆく一階程を擔い、その郷帥を開府・儀同に任じており、谷氏の解釋に妥當性をみとめることができる。しかし本碑銘に關する限り、その兵がいわゆる郷兵であつたとは明記されておらず、また新置の軍府がすべて郷兵によって組織されたわけではないのであつて、郷兵即府兵という解釋を以て全般を推すことはできない。郷帥を以て郷兵を組織せしめる場合、新たに州郡民を徵募する場合、臨時の徵募者を軍籍に固定化する場合、駐留軍兵を所在に地着せしめて軍坊・郷團に編する場合など、恐らく多様な途があつたと思われるが、ともあれこうした外軍總管府に兵を提供する軍府が設置されて行つたことは疑ない。屢々引かれる隋書^{卷二}四食貨志の開皇五年長孫平の奏疏による令に、「諸州百姓及軍人、觀課當社、共立義倉」とあつて、諸州管下に百姓と並列される軍人があつて、これが州管内の軍戸であることは明らかで、軍籍にありながら百姓同様家口は營農し、當兵者のみが州總管の指揮下に入るものであつたことが想像されるが、彼等と總管諸州軍事との間は州長（一州總管・刺史）を通じて結びついているものと思われる。これに對して新たに軍府を設けてゆくことは、從來の州兵を割取して軍府の統領下におき、州長を介さぬ總管府直屬兵とする意義も存したものである。これも有名な、平陳役後の開皇十年詔に、

魏末喪亂、寓縣瓜分、役軍^{（隋書作軍）}_{（今隨北史）}歲動未遑休息、兵士軍人、權置坊府、南征北伐居處無定、（中略）凡是軍人、可悉屬州縣、懇田籍帳一同編戶、軍府統領宜依舊式、罷山東河南及北方緣邊之地新置軍府。

とあるが、權置の坊府に屬する軍人を州縣籍に編入して、しかも軍府において統領することは舊式によるものであるから、先の坊府が軍戸を集住せしめる軍坊とそれを統轄する軍府（驛騎・車騎府）であることは明らかである。そして軍戸を民籍に編入する結果、軍戸の集住する軍坊郷團は解消され一般郷里に編成され、ただ在軍役者本身のみはいわゆる「軍名」あるものとしてその兵籍を軍府で管理し動員差遣に當つたわけである。ここに云う權置の防府こそは、北周の平

齊の役後から外軍總管府に兵を供給するため次々と設置せられて行った地方軍府に相違ない。また、山東・河南・北方縁邊の新置軍府を罷めるとあるが、これらの地域が特に隋に入つて新たに總管府を増置せられた地域に屬するのを見れば、ここで罷められた新置軍府が、新設總管府に兵を供給するため置かれたものの一部で、特に山東河南のそれは平陳役前後にその行軍兵を組織すべく増置を見たものを指していると見て誤りない。文帝は平陳直後の開皇九年の布告において（隋書卷二高祖紀）、「兵可立威、不可不戢、刑可助化、不可專行、禁衛九重之餘、鎮守四方之外、戎旅軍器皆宜停罷、（中略）群方無事、武力之子俱可學文、人間甲仗、悉皆除毀」と宣して裁兵方針を打出す一方、民間の武器所有を禁じて國內の被支配層の武装解除をはかった。その方針の推進の一環として、必要不可欠のものを除いて總管府をも整理に着手しており、また京畿・關中以外の地については、特に軍府の削減に乗り出したのであった。しかし他方においてこの間、特に關内において軍府の増加は著しく、従つてそれらの多くが配隸せしめられた十二衛府の總兵力も大きなものとなつていた。「漢魏南北朝墓誌集釋」第五冊、圖版四四八「劉德墓誌銘」に、

仁壽元年、（中略）授上開府儀同三司、後檢校涇州右武衛三驃騎事、

と見える。涇州には北周時代涇州總管府がおかれていたが、隋に至つては所傳を確め得ない。このことはたとえ廢止はされなかつたとしてもその管兵を縮小されたものかと思われ、その分の軍府は十二衛に配隸せしめられ、侍官としての上番の義務を加えられたものと思われる。而してその結果、涇州管内に右武衛に所屬する軍府が幾つも存在することとなり、劉德はその右武衛所屬の第三驃騎府のことを司つたわけであらう。これは十二衛府所屬の驃騎府が次第に關中の外周部諸州に擴大されてきたことと、且つその府兵の家口が涇州の民籍に入れられていることから涇州の驃騎府として州單位の表記法を必要としたこと、それらグループ分けされた中で各府はまた一連番號を付される仕組みになつていたこと等を示しているのである。

次に隋の總管府の分布から引き出せることは、山崎氏の指摘した如く、華北に三二、四川を召む華中に二七、華南にわ

ずか四、という極めて華北偏重の分布を示している點である。これを唐代の道別に整理し直してみると、次表の如くなる(第四表)。勿論隋の州は必ずしもそのまま唐の州ではないが、大凡の見當をつける手掛りとなることが出来る。

即ち關内の緣邊地帶と河東、隴右に集中し、あとは淮南と江南西道に目立って多い。淮南のそれが専ら滅陳の前進基地として設けられたものであることは明らかであるが、同時にそれは舊北齊治下の勢力が江南と氣脈を通ずるのを防壓する意味をもったものに違いない。楊州・壽州以外はいずれも開皇前半期に既に廢止されていてその任務は完了したのである。江西のそれは、衡・永が既に滅陳後間もなく廢されているが、あとは主に平陳後、湘水・贛水路線の要衝を抑えて嶺南の廣・循へ連なる縱斷線の確保を目的としたものであり、唐では南詔に没入した南寧にも總管府が設けられたのは開皇一七年の雲南遠征の結果である。淮南等の一時的なものを除けば、隋が華南に設けた總管府は決して多くはなかった。その大勢は京畿と東京(洛州總管は毫と共に開皇初に廢止)周邊がもともと軍府を集置された地域であることを合せ考えるとき、まさに唐代における軍府州布置の大勢と大差なき傾向をもっていたと云える。陳朝討滅は既に江南社會からも浮上った存在となっていた南朝に止めの一撃を加えたにすぎず、陳朝治下に擡頭していた江南豪族の一部が起した反抗を鎮壓する力は充分もっていたとはいえ、その江南に對する支配はまだまだ點と線を確保した程度であつたと云つてよい。ただ配置せられた總管が人的に強く中央に結びつけられており、直屬軍府を握っていたことと、それ以外の兵力の武裝解除の推進がその統一を前進せしめることとなつたのである。

ところがこの總管府制は、文帝治下の開皇・仁壽年間のみを以て終り、煬帝即位と共に大業元年正月廢止を見ることになる。山崎氏は總管の多くが隋朝創立時の功臣であつたことから、その任命には論功行賞的性格が多分にあり、よつて文帝一代をもつてその使命を終つたものであらうとされたが、より根本的には煬帝の推進せる中央集權化政策の一環であつたと見るべきであらう。煬帝(晉王楊廣)自身、并州總管としてその實力を蓄養した經驗をもつていた。隋朝支配下の統一が、各般の政策の相乗効果として漸次定着しつつあると判斷し、地方ブロッケ的中間機關の使命は終つたとして、より急

第四表 隋代總管府表

唐道分	隋總管府州名	備考
關內	原, 慶, 延, 靈, 豐, 夏, 會	イズレモ大業初廢止
河東	①晉, 絳, ③并(大原), 隰, 代, 朔, 雲	①開皇初期廢止 ③大業初廢止
隴右	①廓, ②宕, ③秦, 蘭, 岷, 疊, 涼	①同上 ②開皇中期廢止 ③同上
河北	②冀, ③幽, 營, 玄	②③同上
河南	①洛, 毫, ②背, ③徐	②青州開皇14廢 ③徐州大業4廢
山南東	荆(江陵), 襄, 金	イズレモ大業初廢止
山南西	①扶, ③利, 梁(興元), 通	①開皇初廢止 ③大業初廢止
淮南	①淮(楚), 舒, 黃, ②處, 安, 蘄, ⑤揚	①同上 ②開皇中期廢 ③同上
江南東	吳(蘇), 杭	イズレモ大業初廢止
江南西	②衡, 永, ③, 洪, 潭, 江, 鄂, 信	②同上 ③同上
黔中	黔	イズレモ大業初廢止
劍南	益(成都), 遂, 潼(綿), 瀘	同上
嶺南	廣, 循, 桂	

激な集權化政策に踏み切ったものであろう。そしてその際注目すべきは、追いかけて大業三年、從來の驃騎府を鷹揚府と名付け、府の長官を鷹揚郎將と稱し、車騎を副郎將として全國的に軍府の統一をはかっていることである。東南道行臺をおかれた徐州の總管府が最後に廢止されるのと前後してである。これは何を意味したのであろうか。もはや言わずして明らかな如く、總管府の廢止に伴って從來外軍總管府に兵を供給した軍府をもすべて十二衛府に分屬せしめることとして軍府の中央直屬化を推進し、それが完成するに至って全國の府をすべて統一せる官制と名稱の下にいたのである。しかしその結果、十二衛府の各衛に統屬する天下の軍府は尨大な數に上ってきた。これを從來の如く一・二・三の一連番號で呼稱することはもはや徒に煩雜を加えることでしかない。かくて各軍府は、制度上鷹揚府という共通名稱を與えられると同時に、番號ではなく各々地名に因って固有の軍府號を稱することとなったのである。「漢魏南北朝墓誌集釋」第五冊、圖版五四「張伏敬墓誌」によれば、大業三年、右武衛純德府鷹揚副郎將を授けられ、また同じく圖版四八二「鄧□墓誌」に、

大業元年、除鄂州司馬、(中略)累獻功捷、除玄眞府副鷹揚郎將、九年轉尙義府鷹揚郎將、領亡身子弟・驍果等色、

とあるほか、勞氏「唐折衝府考」羅氏「同補」谷霽光氏「同校補」に蒐集せられた少からぬ隋唐揚府關係の金文石刻の類が、すべて某衛某州某々府と稱する形式をとっているのがそれを證している。こうして尠大な外州の軍府がすべて中央の衛府に結びつけられることとなったが、隋書百官志によるに、且ての中外軍における中軍・内軍の系統を引き唐の三衛に相當する三侍の如き、在京の特殊親軍的軍府は同じ鷹揚府でもこれを内軍鷹揚府と呼び、これに對して外軍宿衛、外軍鷹揚官の呼稱を以て諸州（外州）の鷹揚府兵および府官を指しているのを見出す。これらは舊内外軍制度の遺制であると共に、逆に且ての外軍がすべて宿衛に參畫せしめられ、すべての兵が天子の直轄軍となる體制におかれたことを示しているのである。隋の總管府は、廣範な外州への直轄軍府の布置と、その中央衛府への直屬化の過渡期を擔った制度であつた。

(ハ) 唐初の總管府

唐公李淵の舉兵が、楊玄感反亂を先蹤とし、隋末諸反亂における官僚知識分子の動向一般と等しく、反煬帝勢力の一翼をなし、隋朝の支配體制そのものへの本質的反對物ではなかつたことは、最近布目氏によって精力的に明らかにされつつある通りである。唐朝の建設はその中樞に結集せる勢力の人的要素においても北周・隋との一貫性を指摘せられているが、また建設された政權の機構においても隋朝をそのまま受けている。その實質においては煬帝大業年間の制をうけた部分が多いが、當面文帝開皇の制への復歸を旗印とし、たしかにそれに倣つた部分もある。特に分裂せる國土を再統一するに當つては、文帝時代の諸施策をそのままぞつた經過を踏んでいると云つて過言ではない。先蹤者の教訓を充分に生かしたものと云つてよい。唐初の總管府設置も、實は隋の開皇の制の復活でもあつた點は注目すべきである。どこまでそれを意識したか、どれだけが唐初の情勢の生み出した偶然的結果か、或いはそれらの地域が本來獨立した地方ブロックを形成し易いのかはわからぬが、唐初總管府を設置された州の少からぬものが實は隋代（或は更に遡つて北周）に嘗て設けられた總管府の後を襲う結果となつている。一方唐初の總管府はその人的要素において、隋のそれとは反對に、決して中央差遣の將領をもって任ぜられたものではなかつた。前後して設けられていった行臺や大總管が親王を中心とする中央直派の

勢力で固められたのに對し、より廣範に布置せられた下部の總管は、隋代以來の地方官や隋末の小群雄で唐朝に歸順を表明した者を安堵する一つの方策として授けられたものが多かったのである（第五表）。

このことは、既にこれら總管の地位が、やがて唐朝獨自の支配機構の布置が完成してゆけば、早晚發展的解消を遂げるべき運命にあったことを示している。その點では隋初の總管府よりもより一層過渡的性格の強いものであったと云いうる。これら總管府の設置と併行して、武德元年五月、隋の鷹揚郎將を改めて軍頭と稱し、翌月更に改めて驃騎將軍・車騎將軍の名を復活した。即ち開皇の制への復歸であるが、それが關中に入つた直後の李淵政權にとつて如何なる意味をもつたかは別稿に詳論した^⑤。しかしその際明らかにし得なかつた今一つの意味、それが武德元年九月乙巳に始まる新軍府（驃騎府）の設置開始である。それは當初は直接には關中十二軍の編成を可能にせんがためのものであったが、やがて各地に布設されてゆく總管府においても、その下に直轄軍府が設置されて行つたと考えられるのである。武德六年になつて車騎將軍府を驃騎府に統合しているのは、隋において同様の軍府機構の統合を行つたのを思い起させる。これら軍府の下には隋初の制そのままの軍坊・鄉團がおかれていた。しかしやがて國內平定の一應の成就を迎え、武德七年、總管府は都督府と改稱される。その際行軍總管のみは以後も總管の名を以て呼ばれることになつたのは既に別に論じた通りである^⑥。都督府への改稱は、軍事行動の機關から常備軍政機關への改組を意味したが、その際若干の府は整理廢止されている。しかし都督府となつてからも、それは後年の都督とは違つて、實際に領兵して活動していたことは見逃せない。後年、貞觀十年以後も都督領兵の記事は見えるが、それらはいずれもその職掌の中に止められた城隍鎮戍に配屬された防人を統轄したことを指している。しかし武德末までの都督は、その下に自らの軍府を領していたのである。武德七年の總管府の都督府への改稱と共に、驃騎將軍を統軍、車騎を副統軍と改めているが、これは北朝以來の都督—統軍—軍主—隊主の指揮系統の復活に外ならぬ。やがて軍主隊主は隋の大業の制に歸つて（校尉）・旅帥—隊正と改稱し、統軍—（校尉）—旅帥—隊正の軍府官の系統ができ上る。貞觀元年になると、隋以來の州縣の整理が行われ、軍民兩政の切り離しによつて都督府は再

第五表 唐 初 總 管 補 任 表

武德1. 6	陝州總管	永安王孝基	
1. 7 乙卯	靈州總管	郭子和	榆林賊帥，遣使來降
武德2. 閏2	黎州總管	徐世勣	
2. 閏2 乙巳	杞州總管	李公逸	以雍兵來降，授
2. 4	齊州總管	王 簿	
	濟州總管	伏 德	
	青州總管	鄭 虔	
	淮州總管	綦公順	
	滄州總管	王 孝	
2. 4 丁未	揚州總管	陳 稜	隋禦衛將軍，以江都來降
2. 5	嵐州總管	劉 六	遣使請降
2. 9	亮州總管	徐 圓	海岱賊帥，以數州之地請降
2. 9 丁丑	和州總管	杜 伏	賊帥，請降，以爲淮南安撫使
2. 10 癸卯	梁州總管	龐 玉	左武侯大將軍，差遣
武德3. 3	石州總管	劉 季	
3. 4	檢校并州總管	李 仲	
3. 9 庚午	桂州總管	劉 旻	梁師都將，以其地來降
3. 9 丙午	顯州總管	田 讚	
3. 10	汴州總管	王 要	
武德4. 正癸酉	代州總管	胡 大	
4. 5 乙亥	黃州總管	周 法	
4. 6	宋州總管	盛 彥	右驍衛將軍，差遣
4. 7	洛州總管	淮陽王	道玄
4. 9 壬子	光州總管	盧 祖	尙
4. 11	欽州總管	王 雄	誕
	桂州總管	李 襲	志
武德5 正	洪州總管	張 善	安
5. 3	交州總管	丘 和	
5. 4 乙未	欽州總管	寧 長	眞
5. 7 丁酉	高州總管	馮 盎	承
武德6.	朔州總管	高 滿	政

度削減整理を被つて、華北では専ら縁邊地帯を残すのみとなる。華南ではそのときなお残された都督府があり、それが始めのべた如く、貞觀十年以後になつて折衝府をおかれた州と略々一致することになるのである。貞觀二年以後、都督府の任務は總管時代の如く自ら軍府を領し、數州の刺史を統督するものではなくなり、専ら諸州の兵甲器械軍馬の調達と管下城隍鎮戍の糧粟を受けもつこととなる。そして州縣整理の完了する貞觀十年に至り、統軍は折衝都尉、副は果毅都尉、と改稱されて全國の軍府が中央十二衛府の直屬となる體制の完成を見るのである。この間の動きは更に金石・墓志銘等を史料として細密に論證する必要があるが、既に隋の大業年間における鷹揚府制への轉換の内容を知る讀者には、その意味するところについて殊更贅言を要しないであろう。但し通説において以後都督が全く軍事的機能を喪失し、鎮戍を列置せられた邊境以外は單に州と異らず、ただ州の格を示す如きものになり了つたとされる點については些か考慮の餘地がある。軍府の兵はすべて地方官の手を離れたとは云え、新たな州兵の誕生があつたからである。この點はまた別個の問題として考究したい。

さて以上によつて、はじめから近衛軍と結合せる軍府をおかれた關中の中心部を除いては、唐初における總管府・都督府の設置が、地域的に極めて偏在・點在しており、それが先蹤となつて、はじめそれらに隸した軍府が中央化されることによつて軍府州が定まつたこと、従つて軍府州の分布が、關中以外では極めて偏跛なものとなつた所以が明らかとなつてきた。しかし次に問題となるのは、府兵の役をば課役に準ずる普遍的色役の一としながら、何故その負擔を特定州民、それも隋以來の傳統もあつたとはいへ、唐朝創業期の情勢によつて可成り偶然的に定つた特定の州民にのみ負擔せしめ、しかも後年に到るまでそれを固定化し、軍府州民の樂遷禁止規定まで設けて維持に力めたのか。何故より合理的にその負擔を全國的に平等に擴大して一部のしわよせを解消しようとしなかつたかという點である。

五 軍府州固定化の理由と府兵制の意義

軍府州固定化の理由には、やはり「居重馭輕」、中央集權の意圖が働いていたことは事實であろう。しかし華南の如く少數の軍府州しかおかれなかつた所で、これを永久に固定化したことは單なる便宜主義では濟まされぬ。むしろ積極的にそれを好しとする何らかの根據なくしては考えられぬところである。軍府州が固定化されたのは、決してそれ以外の州が軍府州たりえなかつたからではなかつた。それはむしろ府兵の母體としてはその程度で充分であり、その現狀が維持されさえすれば、維持される限り、府兵制の運用には支障がない。否それ以上は設けてみても實際上あまり意味がないと考えられたからであらう。勿論、主として河北においてであるが、その後軍府の増置も行われてはいる。しかしそれでも決して全體としての軍府州固定化の大勢を打破する程の動きではなかつたし、増設された府をも含めて、遠隔地の衛士は漸次京師上番を行わず邊防専門と化し、三衛は京畿以外は早くから納貢となつていた。このことは第一に設置當初からの府兵制の目的が奈邊に存したかと關連し、第二にその目標をなるべく崩さず維持しようとする一般的努力と、第三にそれでも押し止どめ得ないその後の兵員増加要求は、軍府布置の擴大によるよりもむしろ別の方式によつて補充することが好しとせられたこと、第四にそうした措置の結果として軍府州・非軍府州の差別が相當程度均質化され、州民の負擔としては平衡が保たれているとして敢えて改正を行わなかつたこと、第五にそれらの底を流れる唐朝の政治思想の中に、そのような固定化を好しとする考えが横たわつていたこと、等をあげてその理由とすることができであらう。

第一の點について云えば、府兵制の目的が何よりもむしろ地方軍の中央化を通じての裁兵にあり、突厥の脅威減退という情勢の中での對内統一中心の視點に立つて、最少限の兵力によつて中央・地方・邊境の結合をめざし、その現狀を固定化せんとしたことを指摘できる。この點を既に看破して指摘したのは王船山であり、岡崎文夫博士であつた。

第二の點について云えば、いわゆる祖法の維持ということもあるが、むしろ均田租庸調制にしろ律令身分制にしろ一切が唐初の現狀の固定化による政權安定をめざしていたことをあげねばならぬ。それはまた、整然たる法規の机上プラン的整備と現實との乖離を生み出さざるを得ない。これらの點は別の機會に譲る。

第三點は極めて明瞭にあらわれている。即ち太宗貞觀年間に入つて展開される大規模な外征、行軍の組織は専ら兵募を主力としたのであつて、府兵も動員されてはいるが決して後世府兵の力に歸せられた如き力はもつていなかった。兵募は高戸多丁戸優先原則に立つ期限つきの農民徵集兵で、各州に命じてそれぞれの住民の生活に根ざした特技を生かして騎兵・歩兵・水軍等を組織したもので、便宜に従つて發遣を命じたから、北方民族との戦場に近い華北軍府州が重ねて差發を蒙つたこともあるが、むしろ河北・河南、更に華中・華南諸道の非軍府州から差發されたことが多いのである。

第四の點は、唐代前半期における民丁の稅役負擔體系全體を通じて、唐朝が如何なる程度に均衡に配慮を加えていたか（事實はともかく、課徵理念として）の問題であるので別に詳論すべき問題である。

第五の點は、實は唐朝の性格にとつて重要な問題であつて、ここでは一つの思ひつき以上には出られないが、一行の用地之説に見られる如き、一種の地域分業的考へが唐朝の政策を貫ぬいているように見うけられるのである。用兵之地、用財之地といった役割別の地域ブロック政策が、同一の稅役法を適用されているかに見えながら現實の徵收法において各地域で可成り輕重の差を生ずるといったことを通じて、はっきりと看取されるように思う。それは唐帝國の統一というものが、結局大きな地域ブロックの結合にあり、それが再び離反するとき帝國は解體するが、その地域支配そのものはなかなか簡單に沒落しない。そして地域ブロックの壁がくずれて全土の統一を眞に必要なとする條件が發展してゆくと、もはや唐的な政治理念も過去のものとなると同時に唐の如き地域ブロックの背反も見られなくなるように見うけられるのである。

勿論そこには經濟發展の段階的飛躍と行政經驗の蓄積による制度の發達が大きな要素をなしているが、また制度の形成には當時の現實を觀念的に反映した一定の理念が働いていたことも認めねばならない。はじめにもふれた岡崎博士や陳寅恪氏の關中政權説もそうした傾向の一面を捉えたものであつたといえるのではなからうか。こうした諸要素の複合物としての唐的特色と云うべきものを鮮明ならしめることも一つの作業として必要であらうかと思うのである。

註

①

有軍府州という表現に對し、「軍有ルノ府・州」と解し、我が國の「軍團」の呼稱と連關づけて、折衝府を軍(團)と別稱したとする見解がある。たしかに軍府をおかれたのは地方行政區畫としての府と州とを併せ含み、従つて府・州というのが正確な表現であろう。しかし逆に府制を布かれたところで軍府を置かれなかつた所はなく、従つて「軍無キノ府州」は意味をなさない。また唐代には折衝府そのものを軍あるいは軍團と別稱したとは云い難い。なるほど簡點を受けて軍府の兵籍に付せられることを「定軍名」あるいは「入軍」と稱し、逆に軍籍を除かれることを「出軍」「免軍」と云つた。しかし軍政機關そのものの呼稱としては、もし略稱するとなれば「軍府」であつた。軍團の語は、唐ではわずかに舊唐書戴胄傳に貞觀五年の戴胄の上疏をかかげた一節に「比見、關中河外盡置軍團、富室強丁并從戎旅」と見えるのみである。これは上表の中での修辭であるばかりでなく、當時はまだ貞觀十年の折衝府制施行以前で、北周・隋以來の軍坊・鄉團によつて軍士を統轄していたためではないかと思われる。日本の軍團の語は、もし中國の令文に根據をもつとすれば唐以前の令によるものであろうか。かくて有(無)軍府州はやはり「軍府有ルノ(無キノ)州」で、この場合府制を施かれた所をも州の語に含めていゝものと解せられる。敦煌發見「神龍散頒刑部格」(ベリオ三〇七八)の一節に「一偽造官文書印、若轉將行用、并盜用官文書印、及亡印、而行用、并偽造前代官文書印、若將行用、因得成官、假與

人官(同)情受假、各先決杖一百、頭首配流嶺南遠惡處、從配緣邊有軍府小州、並不在會赦之限、其同情受用偽文書之人、亦准此。

とある用例は最もよくそれを示している。

② 日野開三郎「天寶以前に於ける唐の戸口統計に就いて」重松先生記念九州大學東洋史論叢、一九五七、「唐貞觀十三年の戸口統計の地域的考察」東洋史學、二四輯、一九六一、「大唐天寶元年の戸口統計の地域的考察」史林、四二・四、一九五九、「唐代の課丁數に就いて」東方學論集、一九六二。

③ 兵役・色役・職掌人に掛籍している丁男は、在役期間中、見不輪とされたが、不課ではなかつた。

④ 谷響光「西魏北周和隋唐間的府兵」中國社會經濟史集刊、五一、『府兵制度考釋』上海人民出版社、一九六二。

⑤ 岸仲勉『府兵制度研究』上海人民出版社、一九五七、五八一六二頁、同「隋唐史」高等教育出版、北京、一九五七、第二二節特に二一〇—二一一頁。

⑥ 岑氏は王船山「讀通鑑論」卷二に「唐之府兵、世著于伍」とある一句を以て、王夫之は府兵が世兵であることを認識していた、とのべるが、これのみでは些か牽強附會といふべきであらう。

⑦ 拙稿「唐府兵制の成立過程と北衙禁軍の起源」東洋史學、一三輯、一九五五。

⑧ 嚴耕望「中國地方行政制度史」上編四、卷中、魏晉南北朝地方行政制度下冊、特に四九六—五〇二頁の「北周總管府置廢及管區演變表」を参照。

- ⑨ 周書^{七卷}宣帝紀大成元年(579)條に「初令、授總管刺史及行兵(行軍ニ同ジ)者、加持節、餘悉罷之」とあるが、總管を授けられた刺史(總管州軍事)および行兵(行軍)總管に持節(大將軍)を加授したのはこのときが初めてではなく、總管の實職につくもの以外の「餘悉罷之」がこのときの詔勅の主旨である。同書^{四卷}盧辯傳では、「初令」をただ「詔」とする。
- ⑩ 段永が虜姓を賜って即ち爾綿永と名乗ったものである。
- ⑪ 山崎宏「隋代總管考」史潮、第六四・六五合併號、一九五八。
- ⑫ 谷響光『府兵制度考釋』上海人民出版社、一九六二、一〇〇頁参照。
- ⑬ 拙稿「北朝軍制に於ける所謂郷兵について」重松先生記念九州大學東洋史論叢、一九五七、一二四—五頁参照。
- ⑭ 一説に、坊は正しくは防で、坊府とはいわゆる移防と總管府の設置を指すとの見方もあるが、私は坊府とは軍坊と軍府の省略と見るべきものと考ええる。
- ⑮ 拙稿「唐府兵制の成立過程と北衙禁軍の起源」東洋史學、一三輯、一九五五。
- ⑯ 拙稿「節度使制度確立以前における「軍」制度の展開」上、東洋學報、四四—二、一九六一。
- ⑰ 拙稿「唐府兵制度に關する一疑問」史淵五八輯、一九五三。